

EXHIBITION OF KENZO NAKAJIMA

生誕100年記念

# 中島 健蔵展

昭和を生き抜いた、本物の知識人

こんな日本人がいた

2004年1月20日(火) — 2月22日(日)

東京都写真美術館

〒153-0062

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内(JR恵比寿駅東口改札口から徒歩約7分)、TEL.03-3280-0099

開館時間：午前10時～午後6時(本・金曜は午後8時まで、月曜休館) ※入館は閉館の30分前

観覧料：一般500円(400円)、学生400円(300円)、中高生・65歳以上300円(200円)

※( )内は20名以上の団体料金、小学生以下及び障害をお持ちの方とその介護者は無料、第3水曜日は65歳以上無料。

お問い合わせ：毎日新聞社文化事業部 TEL.03-3212-0188

主催：中島健蔵展実行委員会/毎日新聞社/東京都写真美術館

後援：中国大使館/日本中国文化交流協会/日本近代文学館 協力：日本カメラ博物館

撮影・木村 恵一

中島健蔵 撮影の文化人たち



(左から) 大江健三郎、亀井勝一郎 1960年



(左から) 三島由紀夫、奥野健男、(後ろ) 杉森久英 1956年



井伏鱒二 1954年

時代は動いた、昭和は激震した。敗戦後の文化界を再建するために、中島健蔵は走り出す。一時は50を超える文化団体に関係し、めんどくさい橋渡し役なども務めた。一日に会議のはしごが三つ四つは当たり前という日々。ラジオ、テレビの司会や講演、座談、対談をこなし、ジャーナリズムの要求する執筆を夜明けに書き上げる。東大仏文科の万年講師も律義に務め、日中の文化交流のかじはしっかり握って……マルチな活躍は日本中を駆け巡る。

そんな中島は、カメラを首からぶら下げて、肉体の一部として使いこなしたノン・プロ写真家。彼の活動の舞台は、すべてスナッフの現場と化し、撮りまくった顔、顔、顔。ここに膨大な記録が残された。「写るもんかね……」と中島の知友は気にもとめない。時代を映した文化人たち、日本と中国の原風景は、今となっては貴重な昭和の文化遺産たりうる。

21世紀はまた戦いで明けた。未来に向け、中島のメッセージはよりその重要性を増す……。



(左から) 有吉佐和子、杉村春子 1962年

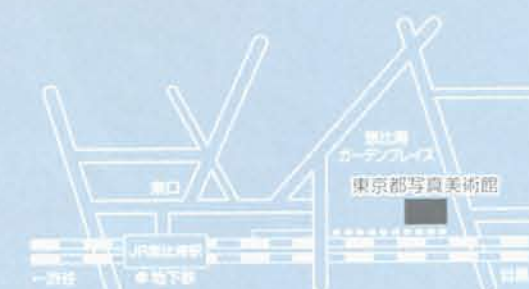
生誕100年記念 昭和を生き抜いた、本物の知識人

# 中島 健蔵展

中島健蔵(なかじまけんぞう、1903(明治36)～79(昭和54)年)東京生まれ。1928年、東京帝大仏文科卒。同研究室副手を経て、34年から62年まで講師。33年ごろから評論を執筆、「作品」「文学界」の同人となる。戦後は文芸家協会、ペンクラブなどの再建に協力。各種の団体を創立し、日本中国文化交流協会理事長など役員を多数務めた。

展示内容

中島健蔵撮影の文化人の肖像のほか、初公開のオリジナル日記12冊と肉筆原稿、貴重な戦前の単行本や本人の著作物などゆかりの品を数多く展示。文学、政治、音楽、美術、切手、細菌学と幅広く関心を持った中島の旺盛な活動ぶりを、昭和という時代を背景に詳しく紹介します。



東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

(JR恵比寿駅東口改札口から徒歩約7分) Tel. 03-3280-0099

ホームページ 毎日新聞社 <http://www.mainichi.co.jp/>

東京都写真美術館 <http://www.syabi.com/>



加藤周一 1960年